

浦賀文化

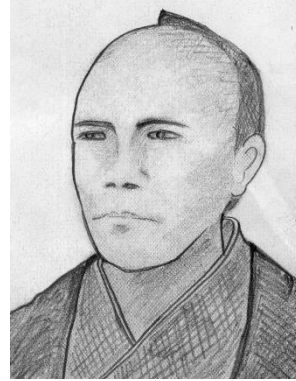
平成 29 年 (2017 年) 7 月 1 日

第 50 号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

吉村昭が描く『黒船』

ペリー来航時にオランダ通詞として重責を果たした堀達之助。開国という歴史の大転換期に通訳として生きた達之助の人生を書籍『黒船』を通じて紹介します。



堀 達之助

嘉永六年(一八五三年)、ペリー提督率いる四隻の黒船は浦賀沖に来航した。この時に活躍した日本人といえば中島三郎助を筆頭に、浦賀奉行所の関係者が語られています。しかし、吉村昭が描いた『黒船』(平成三年刊行)に登場する堀達之助の名は、あまり知られていません。横須賀の夏を演出する「よこすか開国祭」と「久里浜ペリー祭」にちなみ、『黒船』をご紹介します。

作品は、城ヶ島で鮑採りをしていた男たちが巨大な黒船に驚く様子を描くところから始まります。

『海』の方向に顔を向けたかれの体は動かなくなり、眼が大きく開かれた。かれは立ちすくみ、口から悲鳴に似た叫び声もれた。その声にはほかの男たちは腰を伸

ばし、かれの視線の方向に目を向けた。

西南の方角の海上を黒々とした驚くほどの巨大な船が、三本の帆柱を立てた舟をひいて進んでくる。その後方にも、同じように帆船をひいたいかめしい船がづいてきた。

帆船を曳航する二隻の巨船の両側には、大きな水車のような黒い車輪がついている。奇妙な音はその車輪が水しぶきを散らしながら回転する音であった。

こうした黒船の来航を機に、二百年もの長い間続いていた鎖国政策は一気に崩壊し、世界に開かれた文明国家の建設に向けて、急速に歩を進めていくこととなります。それとともに、堀達之助の人生が、時代の波に翻弄されていきます。

さて、作者の吉村昭は、平成元年のころ、この作品を書く時に横須賀市立中央図書館を訪れています。当時の上杉孝良館長からの資料提供など助言を受けていました。筆者も図書館勤務をしており、その場において吉村昭の人柄に接することが出来ました。吉村昭は、自ら作家として健筆を奮うかたわら、

日本ペンクラブの会長職を務めるなど、文筆界のリーダーとして活躍しました。

物語の主人公・堀達之助は、文政六年(一八二三年)十一月長崎のオランダ通詞の家に五男として生まれました。父もオランダ通詞という恵まれた家庭環境のなか、持ち前の才能を発揮し、弘化二年(一八四五年)に父の後継者として通詞となり、人生を歩み始めました。

黒船が浦賀沖に現れた時のことです。オランダ語が堪能な堀達之助は、長崎から江戸に呼び出され、浦賀奉行所へ派遣されました。嘉永六年(一八五三年)六月三日、浦賀奉行所与力の職にあった中島三郎助が最初に旗艦サスケハナ号を訪れた際に、通訳として同行しました。中でも、アメリカ側から高官との交渉を求められた際に、とっさの判断により中島三郎助のことを「副奉行」、与力の香山栄左衛門を「奉行」と伝え、たのは、中島本人ではなく堀達之助でした。これにより中島三郎助と香山栄左衛門がアメリカ側との交渉の中心役となり、親書の交換がスムーズに行われたのでした。

その後は、もっぱら英語の通訳官としての歩みを続けるなか、伊豆の下田勤務を命じられていた達之助は、安政二年(一八五五年)九月、ドイツ通商要

う長い期間にわたり牢獄に入られてしまいました。この時分に、アメリカへの不法脱出の罪に問われて牢獄生活をしていた吉田松陰が書いた文章に堀達之助の名前が残されていたことから、互いに文通をしていたと考えられます。

安政六年(一八五九年)、罪を許されて出獄し、西洋の書物を調査する役所(蕃書調所)に招かれ、辞書編集の仕事をすることになりました。

このように、若いころからオランダ語だけでなく英語も学んでいた堀達之助は、英語の和訳、日本語の英訳にも力を発揮し、日米和親条約の和訳を担当しました。その後、幕府開成所の教授を務めるかたわら、日本で最初の本格的な英和辞典といわれる『英和対訳袖珍辞書』を編纂するなどの大役を果たしました。

この長編歴史小説は、一人のオランダ語通訳から身を起こした堀達之助を通して、幕末から明治初頭における歴史の荒波に翻弄されながらも勇敢に立ち向かう男の人生を描いた傑作といえるでしょう。

(芳賀久雄)

*袖珍：ポケットに入るぐらいの小型の本

★参考文献

- 『黒船』 吉村 昭 中公文庫
- 『横須賀人物往来』より 田辺悟ほか 横須賀市生涯学習財団
- 『三浦半島文学めぐり』 中里行雄 三浦文化研究会



歴史 語りい座・浦賀 四十九

郷土史家

山本 詔一



『近世浦賀畸人伝』XIII

徳田雷我

徳田雷我は幼名を徳松といい、その後弥七と改めた。若い時に侠客の世界に入り、やがて首長と仰がれるようになった雷我は、人の営みが脅かされるような状況になれば、一命にかけて立ち入って事態を收拾した才知にあふれた人物であった。

中年になる頃、遊廓「鶴屋」を継いだ。家業の状況は倒産寸前で、非常に多くの苦難を乗り越えて、立て直しを図った。その甲斐あって通常に家業が営めるようになると、親しい人々を尋ね、年輩いた人には声をかけて招き、幼き者には手を差し伸べて助け育て、それぞれに平穏な一家(族)が営めるように奔走した。この大きく厚い恵む姿勢は賞賛すべきことである。

家業も順調になり、美しい白壁に囲まれ、木立や流れのある池や泉を配した庭園のある住まいが持てるようになる。旅の文人墨客が足を留めるようになっていった。

しかし雷我は、このような遊廓という商売は一生やるべき家業ではないとして、隠居をし、老いた体を維持するために、生け花に挑み、茶事を好み、江戸に遊学してはやることなき方(さまざまな分野を代表す

るような方々)と交流を持つよう努めた。さらに、東海道品川宿にある三代將軍・家光が沢庵和尚を招いて建立した臨濟宗・東海禪寺で利休忌(旧暦二月二十八日)が行われていることを知ると、どんな風雨の日であろうと十六里(約六十四km)の道を数十年にわたって通い続けた。なんと雅なことであろう。

文政九年(一八二六年)八月に七十二歳で亡くなった。墓所は吉井・真福寺にある。

桶口橋平

橋平は、『近世浦賀畸人伝』を編集した桶口有柳の父である。幼名は三之助といい、紀州・宮原の生まれで、十二歳の時に浦賀にある生駒屋(後の宮原屋)の支店に来て、成人になってからは武兵衛と称した。その後桶口の家を継ぎ、吉左衛門と改めた。

干鰯問屋「桶口屋」を継いだころの東浦賀の干鰯問屋の状況は、鰯の不漁だけでなく、もともと低迷期であり、桶口屋の内情も良い状態ではなかった。そこで橋平は、中国の春秋時代に活躍した陶朱の教えを学び、身を粉にして再興につくした。こうして桶平の努力と世の中の変化もあって、桶口屋は以前のような活気ある状況に戻った。

もとより立花にとっても興味をもっていた橋平は、京都に上り池坊につ

いて学び、立花の秘伝を口受され、近郷近在で生け花を学ぶ人の監督をするのを許された。浦賀にもどり生け花の監督をするその傍らで、囲碁にも興味を示し、さらに蹴鞠を好み、酒をたしなんでは一昼夜盃を傾けていても酩酊して乱れるようなことはなかった。よって酒の覇者と称せられた。

また、人が危難にあっている時は、これを救うことが度々あった。さらに、道に外れた行動をしている者があれば、恥ずべき行動をしていると叱り言い訳は聞かなかった。こうした行動を人々は、知勇を兼ね備え、そこに強さや優しさもあると言って讃えた。

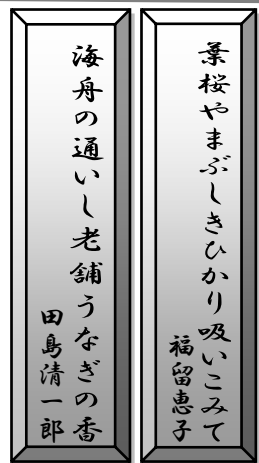
寛政三年(一七九一年)六月、六十四歳で亡くなった。東浦賀・東林寺に葬られている。

畸人伝は物故順に並んでいたが、編著者の父であったので、橋平は最後の登場となった。

俳句の散歩道

柔桜やまぶしきひかり吸いこみて 福留恵子

海舟の通いし老舗うなぎの香 田島清一郎



笑話一題

進化する「パーキングエリア」
高速道路に設けられている休憩施設のサービスエリア(SA)は、パーキングエリア(PA)よりも規模が大きいのが特徴です。しかし最近では、SA並の規模を持つPAが増えており、外観も現代建築で美しいものが数多く見られます。先日立ち寄ったPAでは、江戸時代をテーマとし、ハード面とソフト面の両方に工夫がされていました。外観を当時の建物に近づける趣向と、働く人々の威勢のよさや店内の雰囲気からも、江戸を感じることができ、内外ともに趣向がいき届いていました。そのため、まるで当時にタイムスリップしたかのような感覚になってしまうほどです。

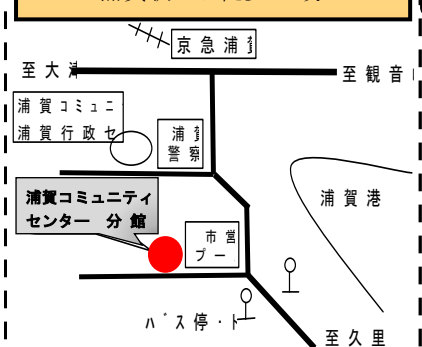
そんな印象を、訪れた人々に与えられるのは、細部にわたる緻密な工夫からです。例えばラーメン屋は「麺処」、ペビコーナは「赤子」という表記をし、実際に機能しているのが特徴です。つまり、単なる装飾だけではなく、機能性を持たせることで、当時と現在をリンクさせている点に魅力を感じます。

これまで見過ごしてきた「パーキングエリア」へ、一度立ち寄ってみてはいかがでしょうか。何か新しいものが見えてくるかもしれません。

(れなママ)

浦賀コミュニティセンター分館 (郷土資料館)

～浦賀駅より徒歩10分～



所在地: 横須賀市浦賀7

電話: 046-842-41

浦賀文化のバックナンバーがご覧いただけます

(<http://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/2490/uragabunka/>)

